

子どもの確かな人権意識を育てる学習について

―「ともに生きるなかま」としての意識を高める学級経営の在り方―

奈良県立大淀高等学校 教諭 杉 浦 美 千 代

Sugiura Michiyo

要 旨

県内各地の中学校を卒業した生徒たちが出会う高等学校1年次において、「ともに生きるなかま」としての意識を高める学級経営の在り方について研究をした。学校行事やホームルーム活動を通じて、生徒たちにそれぞれの活動を振り返らせ、そこから自分たちの課題を見付け、次の目標を設定し、目標達成に向けて取り組ませることで、生徒たちの関心は「個人」から「クラス全体」へと向かった。

キーワード： アンケート、学校行事、ホームルーム教材

1 はじめに

生徒たちの心に響く「人権教育」を展開するための第一歩として、相手を大切に思い、「ともに生きるなかま」である、という意識を生徒たちにもたせることが必要であると考え。

そこで、県内各地の中学校を卒業した生徒たちが出会う高等学校の1年次における「なかまづくり」に重点をおいた学級経営の在り方について研究した。

2 研究目的

「人権問題を他人事のようにとらえている」という生徒の意識を改善するために、「ともに生きるなかま」としての意識を高める学級経営を目指した。

3 研究方法

生徒の実態把握のためのアンケートや学校行事やホームルームの「振り返りアンケート」、クラスの状況に応じたホームルーム教材を活用した。

4 研究内容

(1) 学級の実態把握及び1学期の取組

高等学校では、生徒たちは様々な地域から集まっており、まさしく文字通り一からのなかまづくりとなる。そこで、1学期はホームルームや学校行事を通じて生徒の実態を把握することを中心とした取組を行った。

ア 「校内人権意識調査」から見える入学当初の生徒の意識について

本校では毎年、入学してすぐの1年生に「校内人権意識調査」を実施する。生徒たちが小・中学校でどのような人権学習をしてきたのか、あるいは、それを通してどのような人権意識をもっているかを知るためである。その調査の中に、「あなたにとって人権学習とはどのようなものですか。」という問いがある。2009年度における回答を整理すると、「自分の問題として考えるのは難しい。」という回答が46.8%、「いくら話し合っても解決する気がし

ない。」という回答が25.6%、2つの回答をあわせると全体の70%にのぼるという状況であった。この結果が今年度に限ったものなのかどうかを知るために、過去10年間の結果をさかのぼって調べてみたが、2001年からの10年間において、「自分の問題として考えるのは難しい。」という回答と「いくら話し合っても解決する気がしない。」という回答を合わせると50%を下回ることはなかった。

(図1)

この調査から、本校に入学してくる生徒たちは、「人権に関する問題を解決しようとする意思が弱い」、「人権問題や人権学習を『他人事』のようにとらえている傾向がある。」といった人権意識の実態が把握できた。

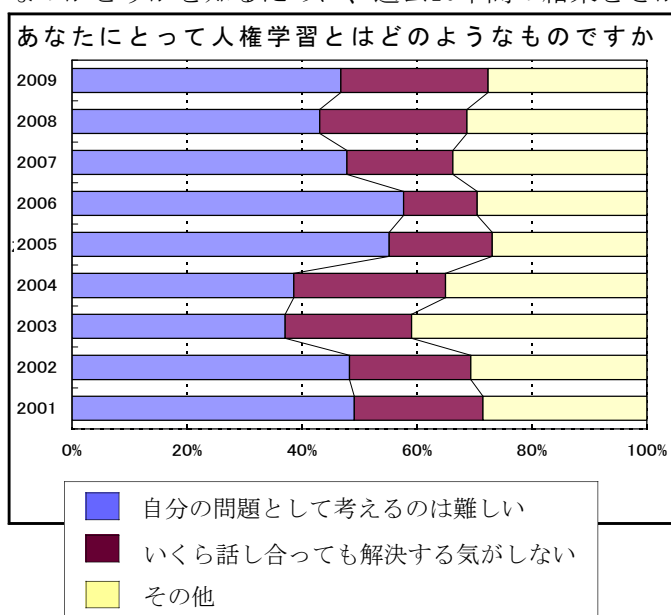


図1 校内人権意識調査結果の推移より

イ 「大高遠足」

「大高遠足」とは32kmの行程を、ゴミ拾いをしながらグループに分かれて歩くという、本校の名物行事である。この長い距離を約7時間かけて歩くが、これほどの長距離を歩くことが初めてという生徒がほとんどで、生徒の不安も大きいようであった。ほとんどの生徒が、まだ知り合って日も浅く、人間関係が希薄な状況で参加するからである。



写真1 大高遠足の様子

「困難なこと」に取り組み、なか

まとともに乗り越えていくことも学校行事の大切な要素の一つである。大高遠足では、グループのなかまとお互いに支えあって、苦しいことを乗り越えられたという喜びや達成感、また、地元の方々に応援してもらった感謝の念などをもつことができたようであった。生徒の感想文には、「しんどかったけれど、これで大淀高校の一員として認められたような気持ち。」と書かれたものもあり、この遠足は、新しい環境の中で、彼らに大淀高校生としての自覚をもたせ、なかまづくりの第一歩を踏み出す重要な行事となったと考えられる。

ウ ホームルームでの活動

本校では1年間のホームルーム活動について計画が立てられており、それに基づいてホームルームを実施する。人権教育については各学期に1回ずつ実施することになっている。

(7) 第1学年の1学期の人権教育ホームルーム

「なかまづくり～身近な問題を通して～」というテーマで、2時間実施した。

a 「『ちがい』はあってもいいもの？悪いもの？」(1時間目)

あってもいい「ちがい」と、あってはならない「ちがい」について生徒たちに意見を求めたところ、容姿や生活習慣などの、「ちがっていてよいこと」については、生徒たちはすぐに思い浮かべることができた。しかし、命の重さや人権などの、「あってはならないちがいについて」はイメージしにくかったようである。その後、お互いのちがいを尊重しあいながら、そのちがいを認め合うことの大切さについて話し合った。

折りしもクラスの中では、入学後仲よくなったものの、一緒に過ごすうちに、それぞれ相手のこれまでと違う面を見つけ、「なんか、最初の感じと違う。」といった不満を漏らしてくる生徒が何人か現れた時期であったため、タイミングのよいホームルームとなった。相手の存在を認めることの大切さや、「ちがい」を認められないことから生じる差別やいじめについて学級担任から話をした。

b 「自分を知る」（2時間目）

生徒たちに、これまでの自分を振り返り、自分の良い点と悪い点について考えさせたところ、自分の良い点を挙げるよりも、自分の悪い点をたくさん挙げる生徒の多さに驚いた。さらに、自分の良い点が「ない」あるいは「分からない」と答えた生徒が5人もいた。

「自己肯定」できる生徒が非常に少ないということがこのホームルームで分かった。

c 1学期の人権教育ホームルームの反省

1学期の2時間のホームルームでは、学級担任が生徒たちに一方的に話しかけるといった状況になってしまい、生徒たちが自由に思ったことを発言できるような様子や雰囲気うまく作り出せなかった。

(4) アンケート「1学期を振り返って」

1学期の終わりに「1学期を振り返って」というテーマで生徒たちに記入式アンケートを実施した。生徒たちからは、自分たちのクラスは明るく元気がよいけれど、仲のよいなかまだけでまとまっていて、クラスの団結力に欠けているという意見が出てきた。「クラスのまとまりがない」と書いた生徒は全体の約3割に上り、生徒はクラスのみんなどのつながりを求めているということも分かった。

このアンケートに出てきたすべての意見を、1学期終業式後のホームルームで伝えた。そして、団結力を高めることがクラスの課題であることを生徒たちと共通理解し、2学期のクラス目標を「一致団結」と決めて夏休みに入った。

また、学級担任としては、「自分のよいところ」が分からないという生徒たちの「自己肯定感」を高める取組を、2学期にしなければならないと考えた。本校の生徒たちは、現状の自分に少なからず劣等感を抱き、自分に自信がもてないでいる生徒が多いように感じた。そこで、少しでも自分に自信や誇りがもてるようになってほしいと思い、2学期の文化祭では「自己肯定感」を高められるような取組をしたいと考えた。

(2) 2学期の取組と生徒の変容

2学期は1学期の生徒の実態を踏まえ、クラス目標である「一致団結」と生徒の「自己肯定感」を高めることを目指し、学校生活や行事に臨むことになった。

ア 文化祭でのクラスの取組

9月の文化祭では、ペットボトルのキャップを使って、校舎の正面玄関に飾る看板の製作に取り組んだ。この取組には2つのねらいがあった。1つは、大きな看板を作るためには、文字通りクラスのみんなが「一致団結」してキャップを集めなければ完成できないというこ

とである。夏休みの間に一人最低でも100個以上集めるとを決めていたが、実際には11,613個のキャップが集まった。平均すると一人あたり313個のキャップを集めたことになる。家族に協力してもらったり、インターハイの補助役員として参加した試合会場で集めたりした生徒もいた。いずれにしても、学級担任の予想をはるかに上回る数となり、予定していたものより大きい看板をつくることができた。集めたキャップはすべて、一度洗って乾かし、それらを一つ一つテープで貼り付けて完成させた。

さらに、使ったあとのキャップはごみとして処分せず、リサイクルして換金し、そのお金を寄付することにした。こうすることで、自分たちの取組がごみを減らし、世界の子どものために役立つんだという有用感をもたせた。これがこの取組のもう一つのねらいであった。誰かの役に立てているという思いによって、生徒たちはやりがいを感じるようになった。この文化祭では、結果として展示部門で最優秀賞をいただいた。



写真2 文化祭展示の看板

文化祭後のアンケートにも、

- ・「自分たちのクラスが一丸となって作業に取り組めたことは、自信をもって言えることだと思いました。」
- ・「クラスのために出来るだけがんばった。キャップ一個一個をはるのは大変だったけど、みんなと協力できた。」

といった感想があった。生徒は、自分たちが頑張ったことが評価されて、大きな達成感や成就感を味わうことができたようであった。

イ 教材「あなたならどう言う？」を用いたホームルーム

文化祭後のアンケートから、新たなクラスの問題が明らかになってきた。それは、文化祭の作業をする中で、相手に対する意見や不満が生じた時に、それを適切な表現で相手にきちんと伝えることができなかつたということである。その結果、グループ内でなかま割れをしたり、言いたいことをきちんと伝えられずに不満をため込み、その後の人間関係が悪化したということが起こった。

このことから、文化祭後の学級経営では、「ともに生きるなかまとして、お互いをより理解するためのコミュニケーション力を高めること」が課題であると判明した。そこで、すぐにホームルームで「あなたならどう言う？」(図2)という教材に取り組んだ。

まず、問1から問3までを先に記入させ、その後、生徒たちに問1の回答を発表させたところ、生徒の意見は大きく5つのグループに分かれた。他の生徒の意見を聞いた後、最終的にこのような場面で一番理想的な言い方はどれかを選ばせた。(図3)

「あなたならどう言う？」

問1 日曜日、一緒に大阪に行くことになったAさんとB君。ところがB君は約束の時間を1時間もオーバーしてやってきました。Aさんはもうカンカンです。さて、あなたがAさんならどう言う??

問2 あなたのその言い方に対して、B君はどう思う??

問3 そのあと二人の雰囲気はどうなる??

問4 ほかの人の言い方で、良いと思ったものは?

問5 一番理想的な言い方は??

図2 ホームルーム教材1

「批判や説教をする。」と答えた生徒は、授業の前半と後半で変わらず3名いた。この生徒にその理由を聞くと、「そうすることが相手のためになる。」という信念のようなものを持っているようであったが、その伝え方が重要であると指導した。

「怒る」と回答した生徒は、授業の前半11名から後半2名へと減少した。これは、感情に任せて相手に怒りをぶつけることがその後の二人の関係によくないということに気付いた生徒が多かったからであると考えられる。

「怒る」のがよくないと気付いた生徒の多くが、この「理由を聞く。」という回答を理想的な言い方として選んだ。しかし、「何も言わない。」という生徒も増えており、何も言わないことでその後二人の関係が気

まずくならなくてよいと安易に考えているのではないかとも思われる。

このホームルームの後、なかま割れをしたグループのメンバーを個別に呼び、話合いをもたせた。お互いにどのような言い方をすればトラブルにならなかったのかについて考えさせたところ、トラブルの中心的人物であった一人の女子生徒が、「自分の言い方が攻撃的であったからだ。」と気付いた。そして、

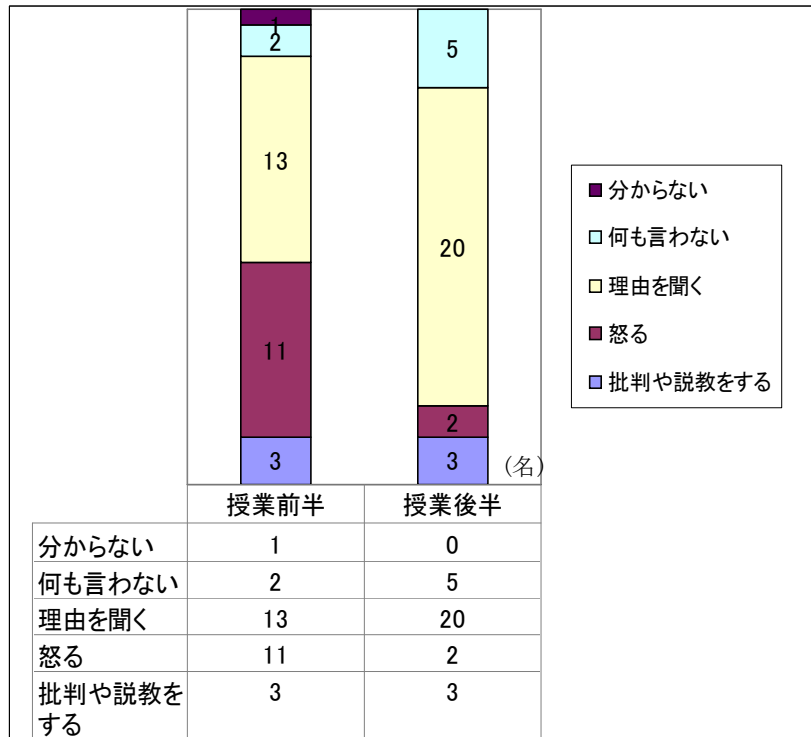


図3 ホームルーム教材1についての生徒の意見集計

彼女は次のような作文を書いた。

<生徒の作文>

相手に自分の言いたいことを伝えるにはどうしたらいいか、ということについて考えてみたいと思います。今まで、私が人に、まちがっているところや直してほしいところを伝えるときは、いつも文句口調になってしまい、ケンカになることが多かったです。そうすると相手も腹を立てて、最終的には何の解決にもならなくて、私が相手にまちがっているところを伝えた意味がなくなります。もう少し違う言い方はできないの？と皆に言われても、相手の気持ちを考えることなく、自分の悪いところも認めずに、「相手が悪い、悪い。」とばかり言っていました。でも、よく考えてみると、相手のまちがっているところを、私が勇気を出して伝えても、私の言い方がよくなかったら相手にも伝わらないうえに、今までの私の言い方だったら相手が怒るのも当然だなと思いました。

今回、周りのことを考えずに自分中心に何でも言うてしまうことはいけないことだと思えたし、私が口にした言葉を聞いて傷ついた人もいっぱいいるだろうし、学校に来づらくなってしまった人もいると思います。

人にものごとを伝えるときは、まず相手の気持ちを一番に考えて傷つかないように言うこと。でも、言いたい内容はきちんと伝えること。そして、周りの人のことも考えて、どうすれば解決するかをしっかりと考えながら行動していくことが大切だと思います。

相互理解のために、コミュニケーションは不可欠だが、このホームルームを通じて、生徒には、相手に不快感を与えず、しかも自分の言いたいこともきちんと伝えるためにどうすればよいか、を考えさせるきっかけになったと思う。

ウ 2学期の人権教育ホームルーム

障害者問題（主に視覚障害）についてのホームルームを3時間行った。ノーマライゼーションの実現に向けての取組が進められている今、その第一歩を踏み出すために偏見や思いこみをなくし、障害者問題について本当の意味で理解することをねらいとした。ノーマライゼーションの実現に向けて何が必要か、自分に何ができるかを考えていくきっかけにしたいと考えた。

(7) アイマスク体験（1時間目）

1時間目はアイマスクを用いた体験学習をした。アイマスクを装着した生徒、介助する生徒、記録係の生徒の3人が一つのグループになり、校舎内の様々な場所を歩いた。生徒たちは、「見えない」ことがいかに不便なことであるかを身をもって経験し、「見えない」ことの困難さを体験する一方で、「見えないこと」で視覚以外の感覚が鋭くなり、ちょっとした風や空気の変化、聞こえてくる音、そういったものを通じて周囲の状況を把握することもできるんだ、と気付いた生徒もいた。

(4) ビデオ視聴（2時間目）

2時間目には、目の不自由な少女が、家族と支え合い、水泳でパラリンピック出場を目指して努力する姿を描いたビデオを視聴した。「見えない」ということの困難さを前時の学習で体験した生徒たちにとって、「目が見えなくてもできることはある。」と力強く話す少女の姿は印象的であり、反響は大きかった。

(5) まとめのホームルーム「自分たちに何ができるか」（3時間目）

3時間目のまとめのホームルームでは、障害をもった人たちと「ともに生きるなかま」と

して生活していくために、自分に何ができるのかを考えさせた。

社会のバリアフリーがどれだけ進んでいるかを知ってもらうために、校内や学校周辺のバリアフリー化された場所をスライド写真で紹介した。

(写真3)

本校の校門入口から、校舎の正面玄関まで点字ブロックがはめ込まれている様子を紹介したところ、多くの生徒は、「こんな場所に点字ブロックがあったなんて知らなかった。」と驚いていた。

また、ユニバーサルデザインの商品を教室で紹介した。生徒は、障害をもった



写真3 人権教育ホームルームの様子

方のために様々な工夫がされていることを知り、そしてそれらが、実は障害をもった人に限らず自分たちにとっても便利なものであることにも気付いたようであった。

このホームルームでは、障害をもった人たちを含めて、社会に生きる人すべてが「ともに生きるなかま」であるということに生徒たちが気付けば、バリアフリーやユニバーサルデザインは必要不可欠なものであると理解できると考えた。

ホームルームの終盤で、「社会のバリアフリーが進んでも根本的な解決にはならないのでは？」と生徒に問いかけたところ、ある男子生徒が、「自分自身が変わらないと。」と発言した。ハード面のバリアフリーを進めるために最も重要なことが、私たち一人一人の「心のバリア」をフリーにすることである、とホームルームの中で気付いてくれた男子生徒のこの発言は、3時間の人権教育のホームルームの成果を表していると感じた。また、そういった発言をホームルームの中で自然と出せるようになったクラスの雰囲気の変化も感じることができた。

エ 教材「クラスの生徒一人一人の良いところを書こう」を用いたホームルーム

2学期の終盤に入り、生徒たちに、自分がどれほどクラスのみんなのことを「ともに生きるなかま」として意識できているかに気付かせるために、「クラスの生徒一人一人の良いところを書こう～私からクラスのみんなへのコメント～」(図4)という教材を展開した。これは、一人の生徒がクラス全員の良いところを記入する、という教材である。

記入するに当たって、

- ・それぞれの人の「良いところ」のみを書くこと。
- ・まず書ける人のところからどんどん書き込んでいくこと。
- ・しゃべったことのない人でも、相手の表情や雰囲気から「良い」と感じることに触れて書くこと。

といったアドバイスを与えた。

生徒はふだんから仲よくしている人に対しては、たくさんコメントを書くことができた

が、「しゃべったことがない子のは書けへん。」と口々に不満を漏らした。書ける人のところから書いていくうちに、クラスの中での交友関係が浮き彫りになり、その範囲の狭さに気

「3組の一人一人の良いところを書こう」

私・僕（ ）から3組のみんなへのコメント

NO	氏名	コメント
1	〇〇△△	誰にでも優しいし笑顔がかわいい。
2		自分のペースでがんばっている。周りの子を気にかけてくれる。
3		何事にも真剣に向き合っている。
4		ユーモアにあふれている。
5		笑顔がかわいくて、和む。
6		いつも授業をまじめにうけている。
7		勉強もしっかりできて、話すすと面白い。
8		少年の心を持ってる(笑)ムードメーカー！わお
9		いつも落ち着いている。
10		たまに言う発言がおもしろい。
11		なんとなくかわいい。
12		優しい。話しかけやすい雰囲気を持っている。
13		話しやすい感じ。
14		国語の分からんプリントのどこ、わざわざ教科書見て教えてくれた！
15		ウェイトリフティングでいっぱい表彰された。(°0°)/
16		テニスがんばってる。
17		めっちゃ気配りしてくれるし、なんか大人。でもかわいい。
18		優しいと思う。
19		笑い方がおもしろい。
20		とにかく、明るくておもしろい。
21		明るいし、おもしろいし、モノマネ似てた！
22		おもしろい、(^0°)/マッチョマン！！
23		かわいいと思う。
24		マイペース。
25		いつも笑顔で、優しい。
26		のほほ〜んとしてる。
27		話しやすいし、マイペース
28		おもしろいし、話してみるとめっちゃ乙女でかわいいー！！(^0°)
29		マイペースやと思う。
30		作文の発表で、新しいことにチャレンジした気持ちがいいと思った。
31		優しい。
32		おもしろいし、話しやすいし、なんか楽しい〜。最高やな！
33		運動神経めっちゃイイ。
34		いっつも国語ががんばってていいなあ〜と思う。
35		絵がうまい！！
36		3組の番長☆☆☆(笑)おもしろい(^0°)/

図4 ホームルーム教材2

一人一人の良いところを書こう〜私からクラスのみみんなへのコメント〜」の集約として、3学期中に、「〇〇さんの良いところ」というプリントに打ち変えて、一人一人に返していく予定である。自分がクラスのみみんなからどんな風に思われているのか、あるいは、自分でも気付いていない自分の「良い点」を知ることによって、「自己肯定感」を高める機会にした

オ アンケート「2学期を振り返って」

アンケートの結果では、「一致団結する」というクラス目標が達成できた、と感じている生徒が65%に達した。また、「みんなで一緒に2年生に進級したい。」や「来年もこのクラスでいきたい。」と書いている生徒も数名いた。この段階で生徒がクラス全体がお互いを、「ともに生きるなかま」として認められるようになりつつあるという手ごたえを感じることができた。

2学期の終業式後のホームルームで、このアンケートの結果を伝えた。クラスのみみんなが「まとまってきたと感じてくれている。」と、クラスの成長を生徒と共に喜んだ。

次に、生徒が3学期にむけて課題として挙げたことは、学習面のことであった。「みんなで2年生に進級すること」これが、3学期のクラス目標となった。この目標達成に向けて、授業を大切にしていることが出席率に表れている。最も低い時には93%しかなかった出席率が、現在97%にまで上昇した。また、2月に実施された漢字能力検定にはクラス全員でチャ

付く生徒もいた。

また、「あの子にええとこなんかいいわ。」と言う生徒には、「悪いところばかりの人なんていないよ。あなたもそうでしょ？」とアドバイスし、お互いの「良いところ」を「認める」ことの大切さについても触れた。どの生徒も、クラスの一人一人の存在をきちんと認識し、それぞれの「良いところ」を書くことができた。

この「書くことができた」という事実が、クラスの生徒の成長の証ではないかと考える。いやならば、書かないでそのまま提出する生徒もいたはずである。しかし、コメントの長短はあるものの、全員がきちんとクラス生徒の良いところを見つめ、書くことができたということの評価したい。

今回提出された「クラスの生徒

レンジした。生徒は3学期の目標達成に向け、自分のやるべきことに取り組む努力をしている。

5 終わりに

1学期前半、生徒の関心はクラスの中でも一部のごく親しい友人にしか向けられていなかった。しかしながら、春の「大高遠足」で、困難なことをなかまと共に乗り越えたことは、クラスのなかま意識を高める第一歩となった。

また、1学期末のアンケートでは、生徒は自分たちの課題を的確に指摘していた。この課題を2学期の目標に設定したことで、生徒の関心はクラス全体に向けられるようになった。文化祭では、自分たちの取組が社会の役に立っていると感じられたことや、自分たちが頑張って取り組んだことをきちんと評価されたことなども、生徒たちの自己肯定感や有用感を高めることになったと思う。誰かの役に立ちたい、認められたい、という思いをしっかり受け止め、学校生活の中ではぐくんでいくことの必要性を改めて実感した。

これまでも生徒たちに、学期末ごとの「ふりかえりアンケート」は実施してきたが、それは学級担任が生徒たちの思いを知るためのものとして活用してきただけであった。しかし、今年度は、クラス全員の意見を生徒たちに返すということをした結果、自分の周りにいる友達がどのようなことを考えているのかを知り、それらの意見を基にして自分の考えを深める手がかりとなったようである。

アンケートの結果からクラスの課題を見つけ、それを次の目標として設定するということを繰り返し行ってきた。その結果、みんなで目標を達成するために、自分にできることを考えられるようになっていった。このことが、「ともに生きるなかま」としての意識の高まりにつながったと考える。学級の目標を立て、それを実行し、チェックし、そこからさらに課題を見つけて次の目標につなげるという方法（PDCAサイクル）は生徒たちの意識の向上に大変効果的であったと考えている。

また、クラスの中で起こった問題を一般化し、教材として取り上げた「わたしメッセージ」や「クラスみんなのよいところ」では、その教材を展開した際に、「今の自分の状況」と教材が一致していることに気付き、今の自分の抱えている問題と照らし合わせて考えることができた生徒がいた。学校行事や年間のホームルームの実施計画などもあり、限られた時間の中ではあるが、生徒たちの状況に応じた教材を、そのタイミングを逃すことなく積極的に展開できれば高い効果を得られると考える。

最後に、この4月から私自身が常に心がけてきたことは、学級担任とクラス一人一人の生徒との関係を密にすることであった。中でも最も意識したことは、生徒に対してまず自分自身をオープンにし、「私」という人間を知ってもらうことだった。自分が心を開かなければ、当然のことながら相手も自分の心を開こうとはしてくれないだろうと考えたからである。学級担任である私とクラスの生徒たちとは縁あって出会い、今ともに時間を過ごしていること、これが私にとってかけがえのない大切なことであるということを生徒たちには伝えてきた。

学校生活において、生徒たちに、「自分は学級担任から大切にされている」と感じてもらうことが、生徒たちと学級担任との信頼関係を結ぶ第一歩であると思う。これがなければ、どのような教材を準備しても、また、どのような学校行事に取り組んでもよい成果を上げることはできないし、ましてや、生徒たちの意識を変えることもできないと考える。

6 今後の課題

今後の課題として、生徒の中に芽生えた「クラスのなかま」に対する意識を、次はクラスから学校全体、そして社会へと広げ、学校の中で自分は何ができるのか、社会の中で自分は何ができるのか、ということを考えさせる取組を継続的に行いたい。そして、社会のすべての人が「自分とともに生きるなかまである」といった意識を高めることで、生徒の中にある「人権問題は他人事」という意識を払拭^{ふつしょく}する取組につなげていきたいと考えている。